

図1 残留日本人・日系人の最終学歴

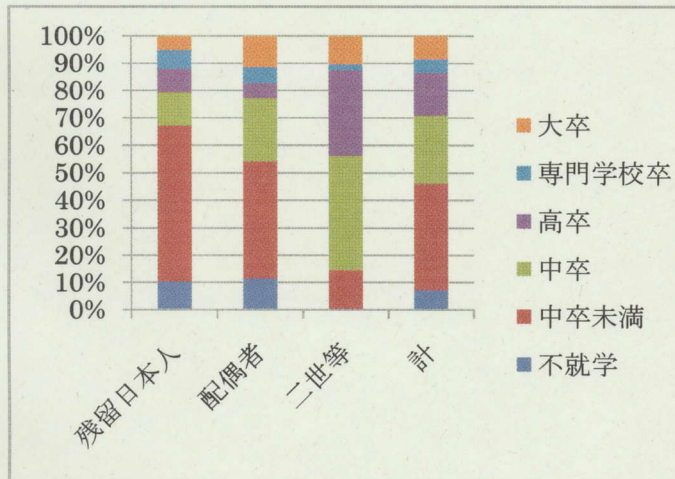


図2 残留日本人・日系人の中国語読み書き

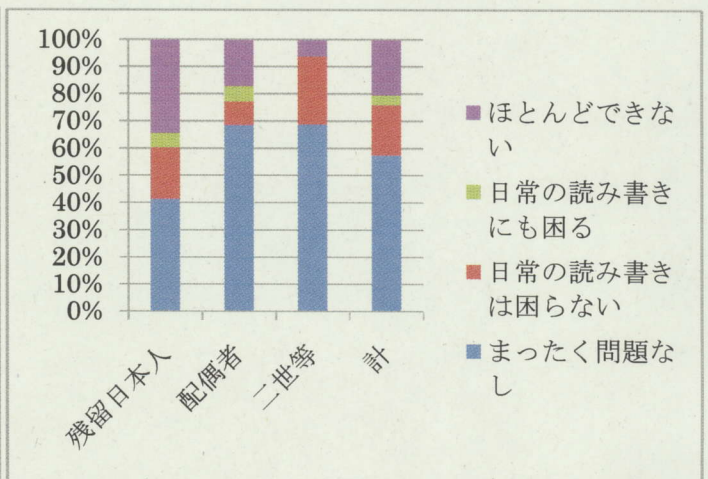


図3 残留日本人・日系人の日本語会話

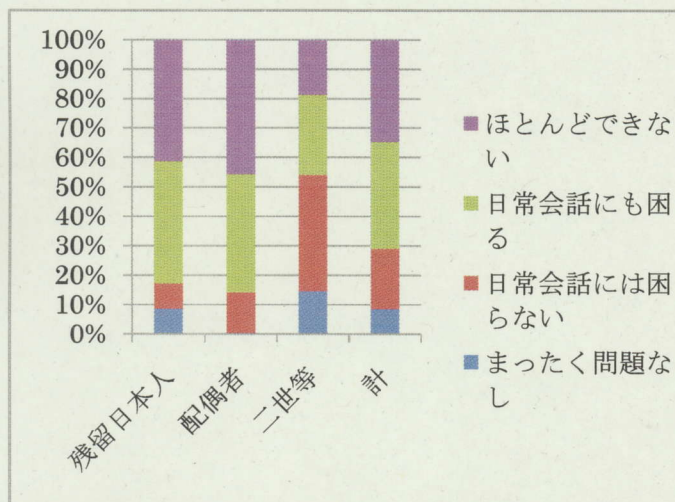


図4 残留日本人・日系人の日本語読み書き

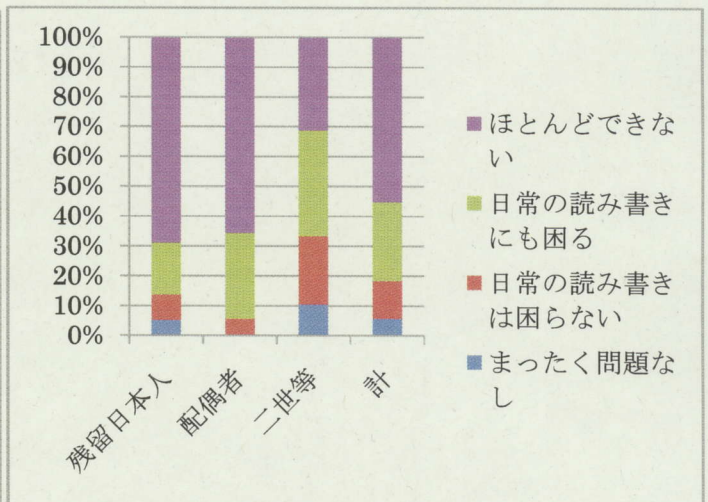


図5 残留日本人・日系人で「日本語の問題」に言及

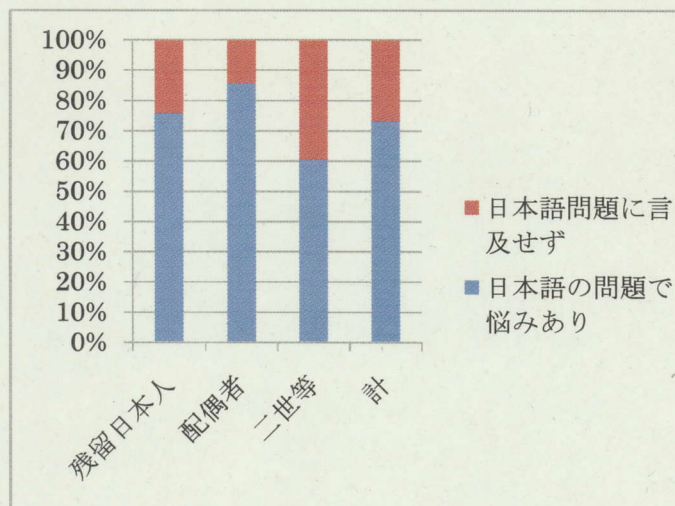


図6 残留日本人・日系人に占める夜間中学生

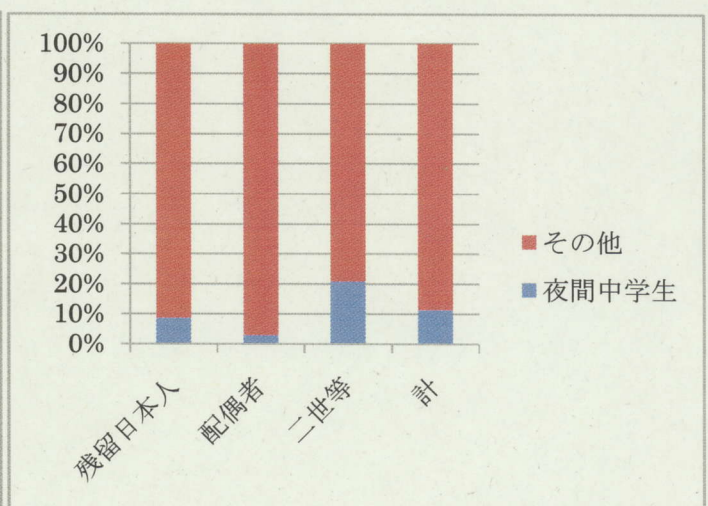




図 7 残留日本人・日系人の年齢構成

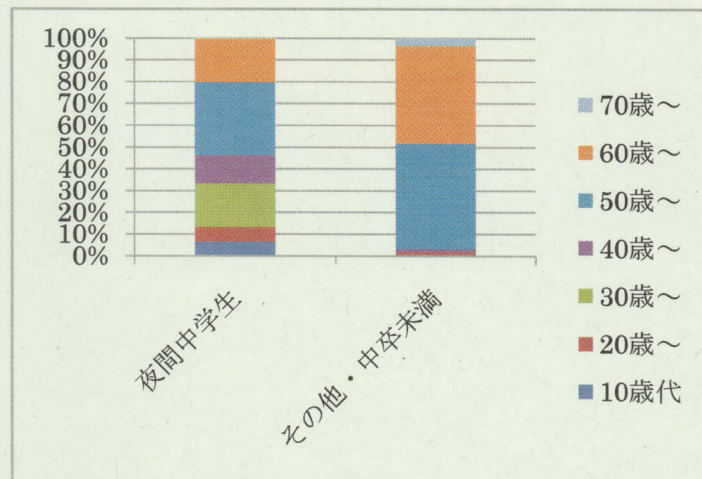


図 8 残留日本人・日系人の日本語読み書き

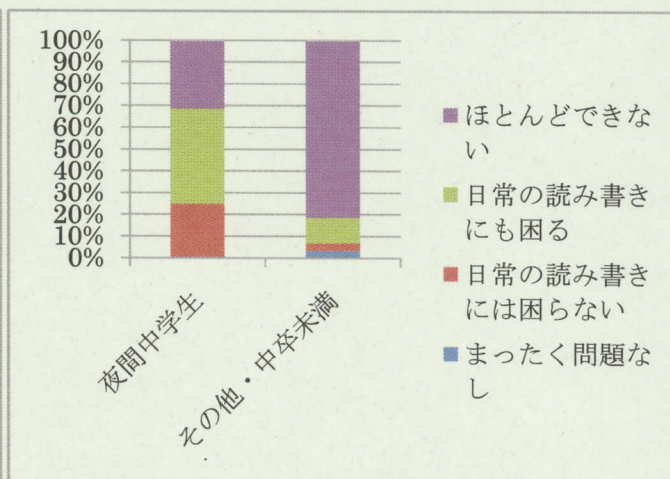


図 9 残留日本人・日系人の日本語会話

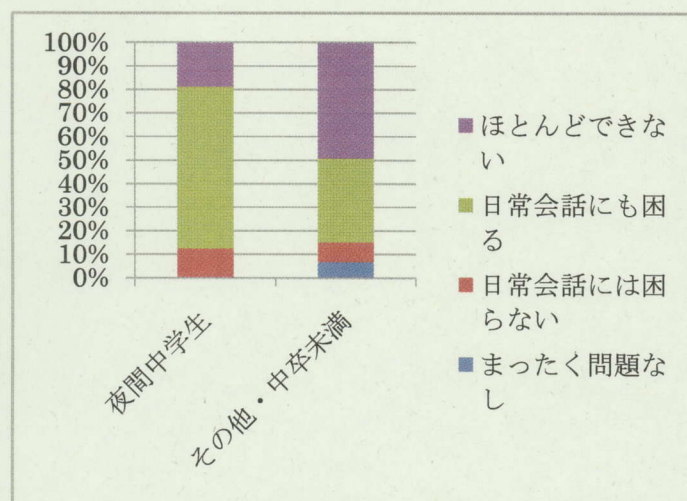


図 10 残留日本人・日系人で「日本語問題に言及」

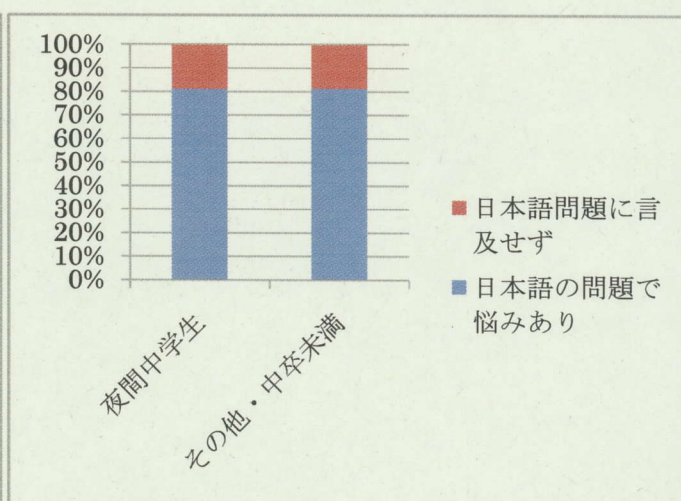


図 11 残留日本人・日系人の中国語読み書き

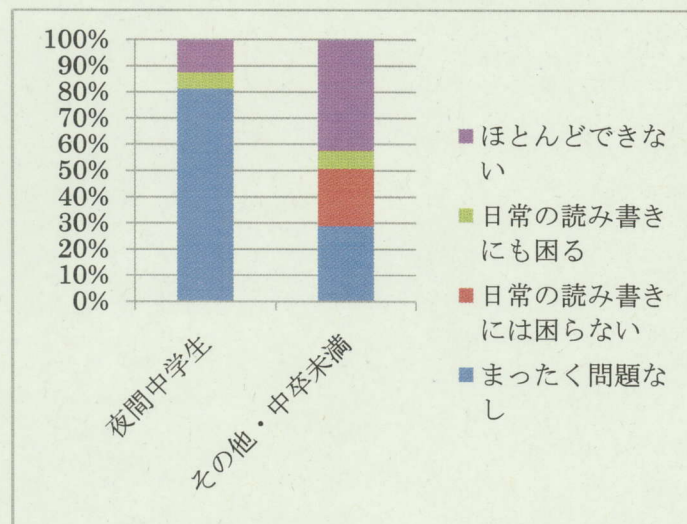


図 12 インタビュー調査対象者の内訳(計 150 名)

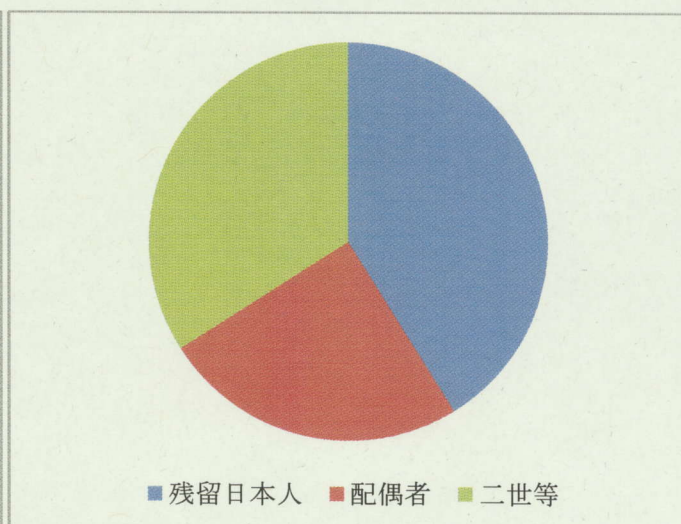


図 1～12 の資料出所:インタビュー調査。



図 13 夜間中学生・系別人数

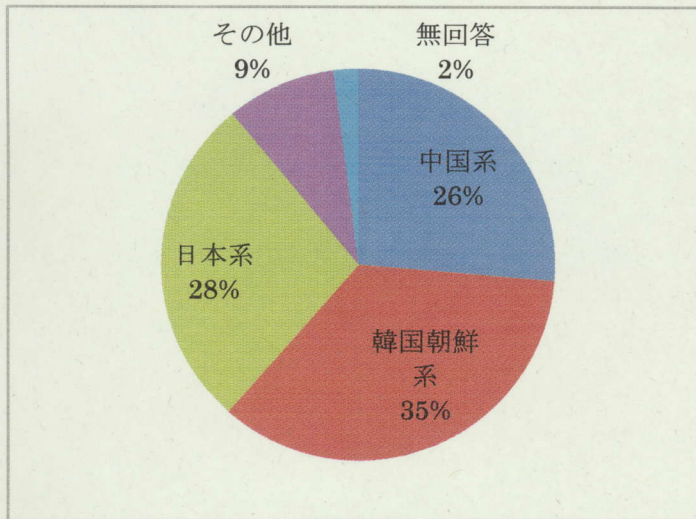


図 14 夜間中学生・系別・年齢構成

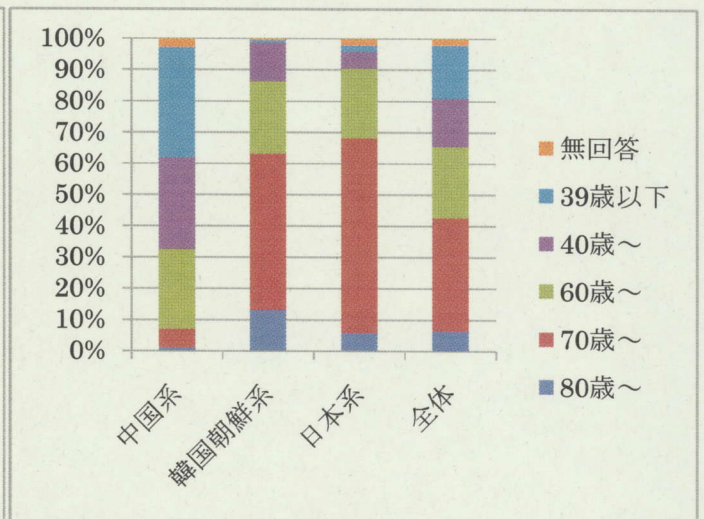


図 15 夜間中学生・系別・性別

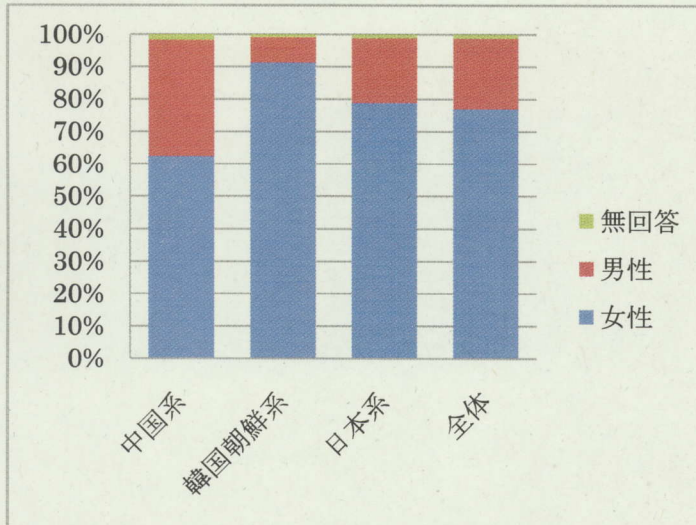


図 16 夜間中学生・系別・仕事

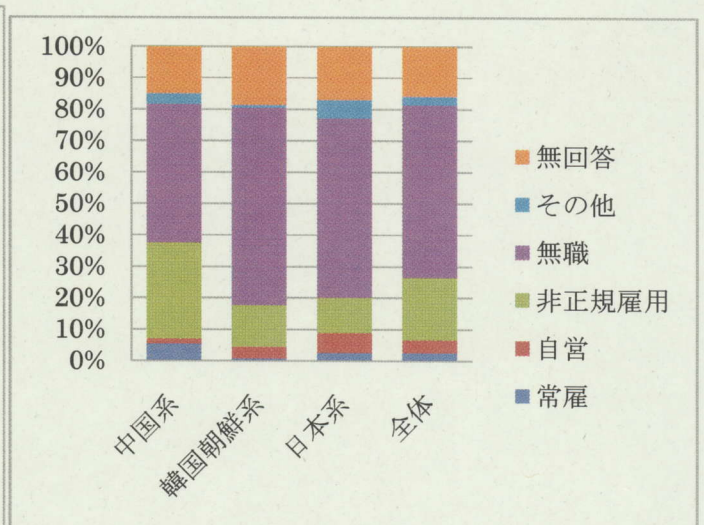


図 17 夜間中学生・系別・出身地

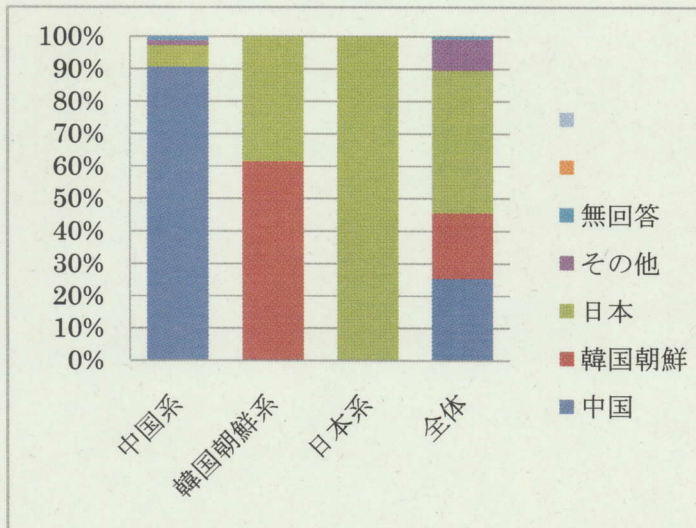


図 18 夜間中学生・系別・国籍

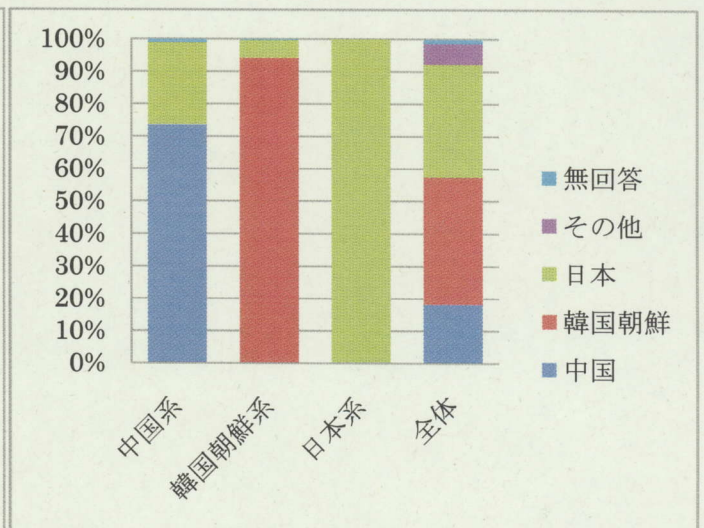




図 19 夜間中学生・系別・最も話しやすい言語

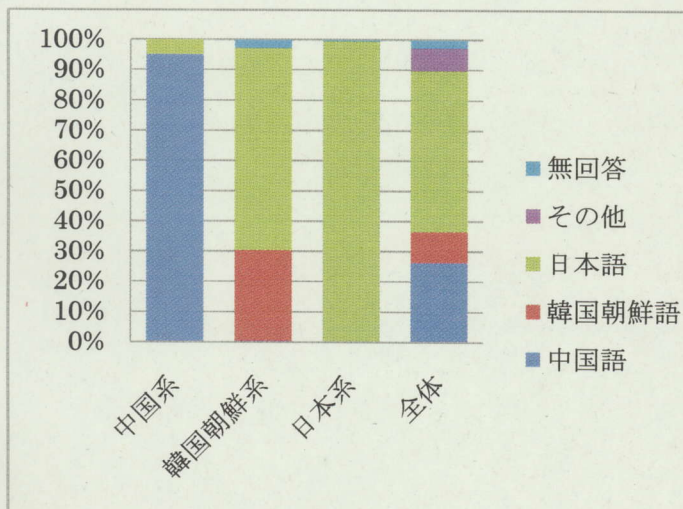


図 20 夜間中学生・系別・日本語の読み書き

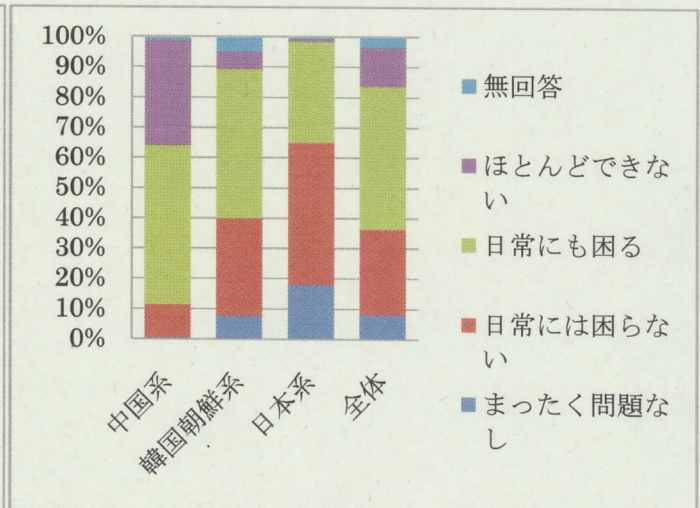


図 21 夜間中学生・系別・片道の通学時間

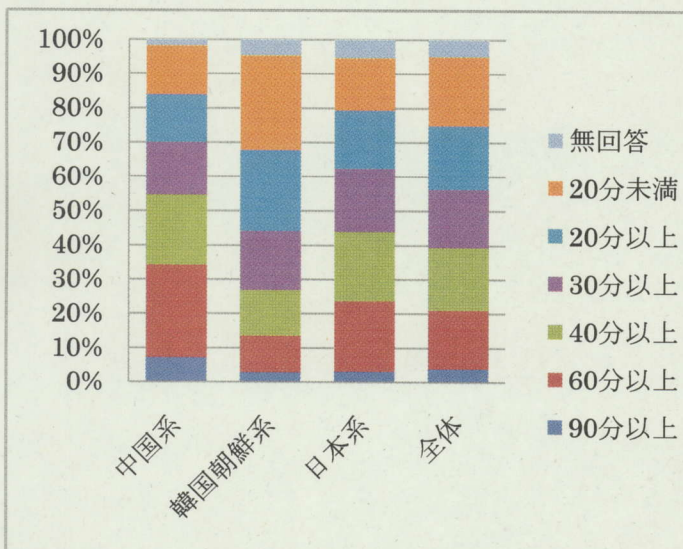


図 21 韓国朝鮮系・在籍年次別・日本語の読み書き

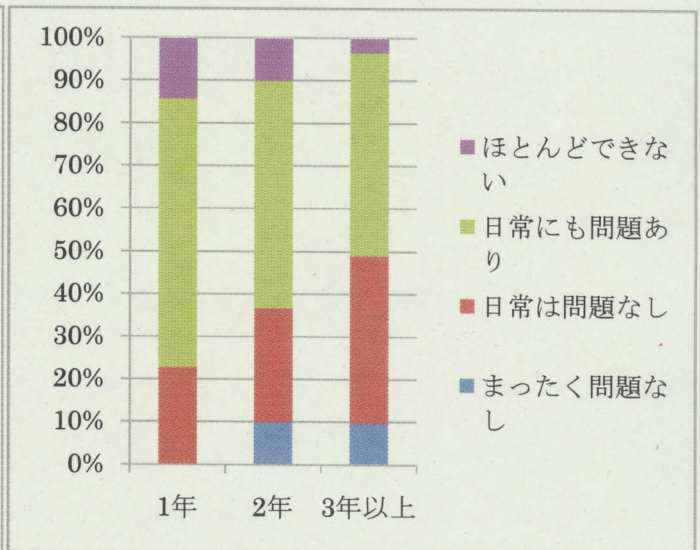


図 23 韓国朝鮮系・在籍年次別・「文字の読み書きで悩み」

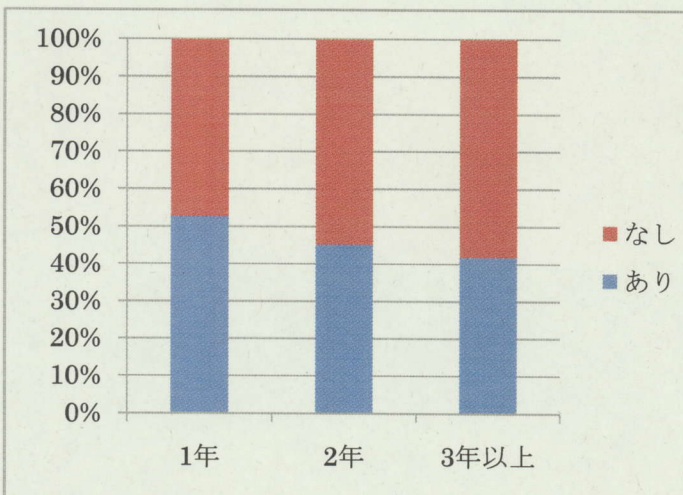


図 24 中国系・在籍年次別・日本語の読み書き

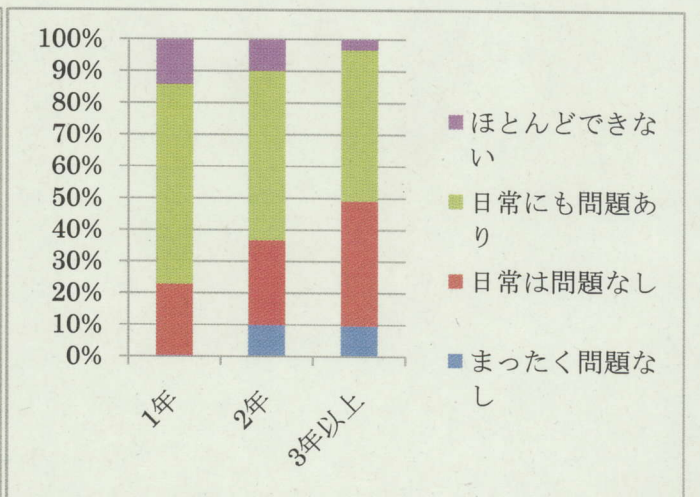




図 25 中国系・在籍年次別・「言葉・日本語が通じないで悩み」

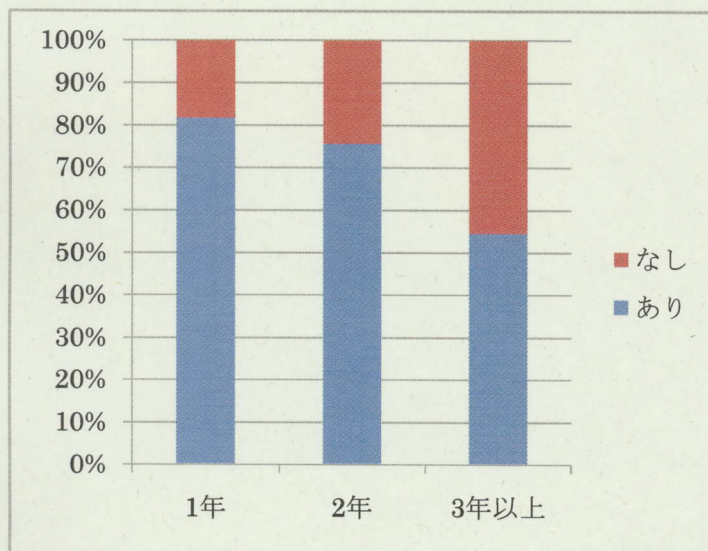


図 26 中国系・相談相手の項目数

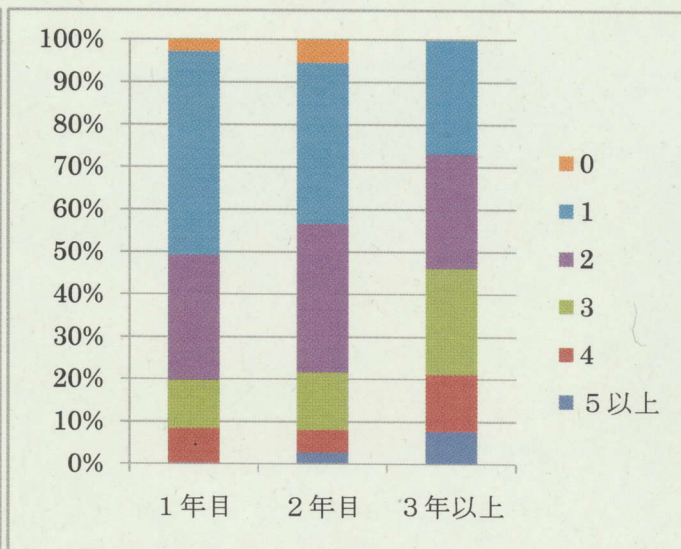


図 27 夜間中学生・系別・子どものころ、学校に行けなかった理由

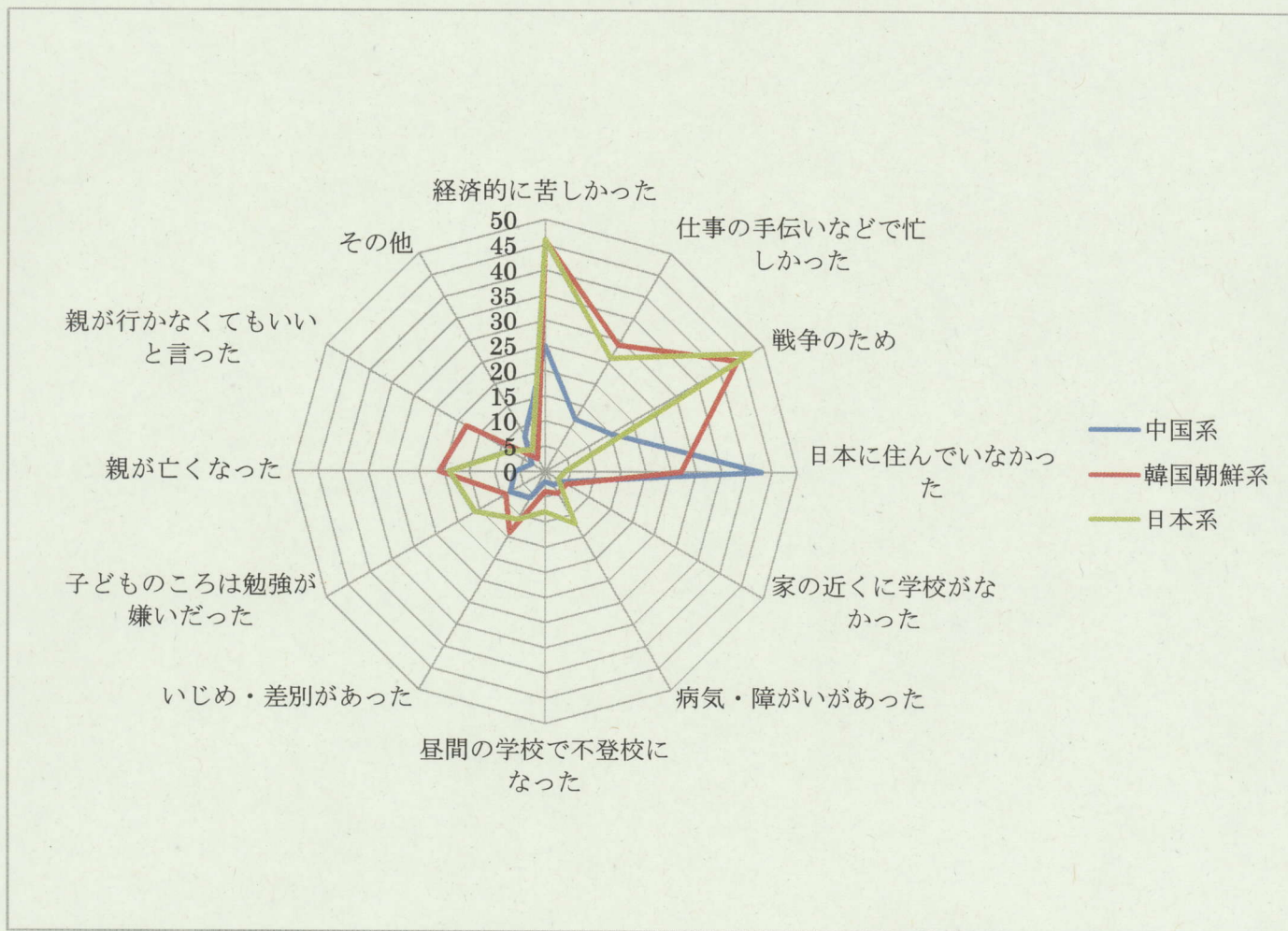




図 28 夜間中学生・系別・日常生活の悩み

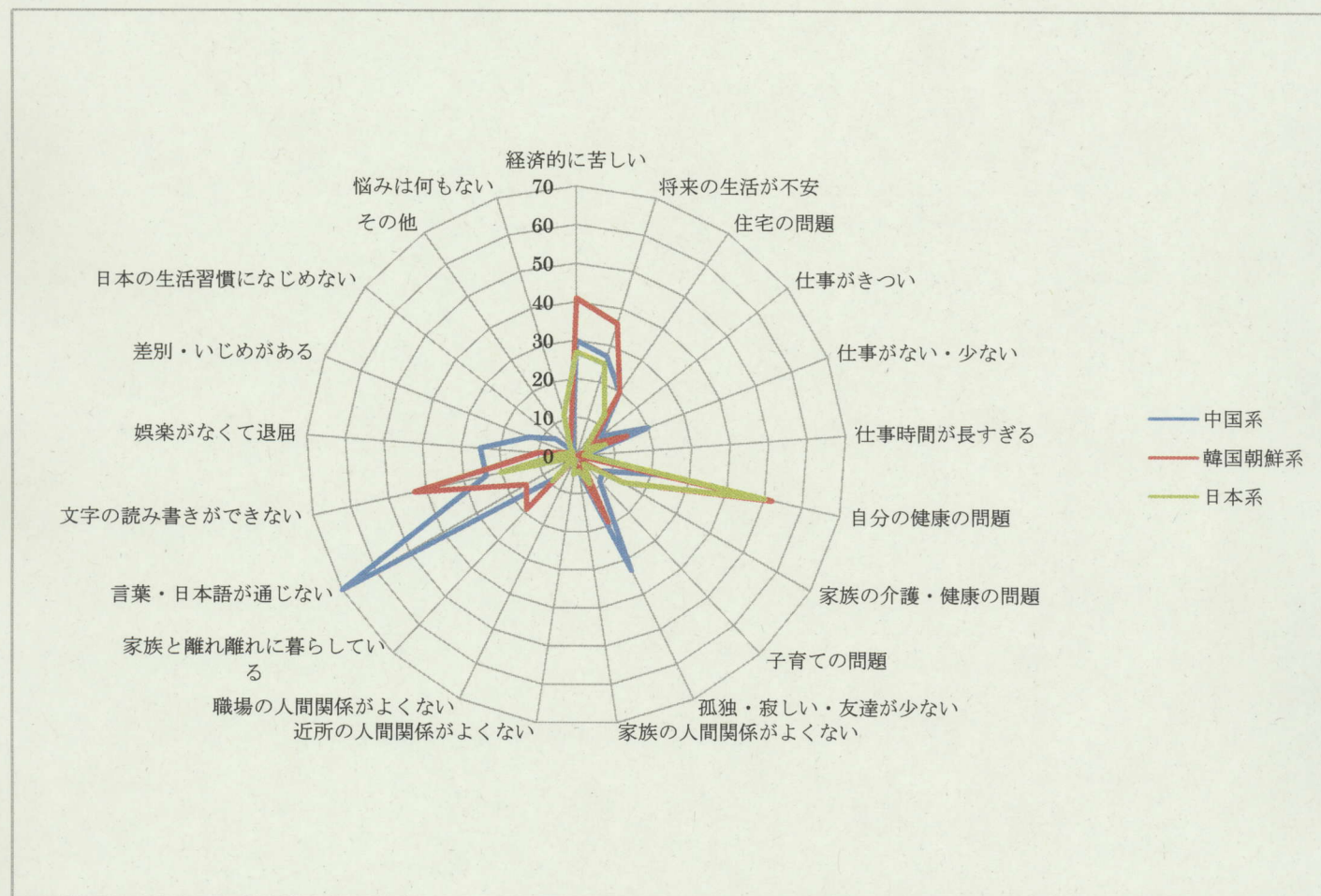


図 29 夜間中学生・系別・夜間中学のことを、だれに教えられたか

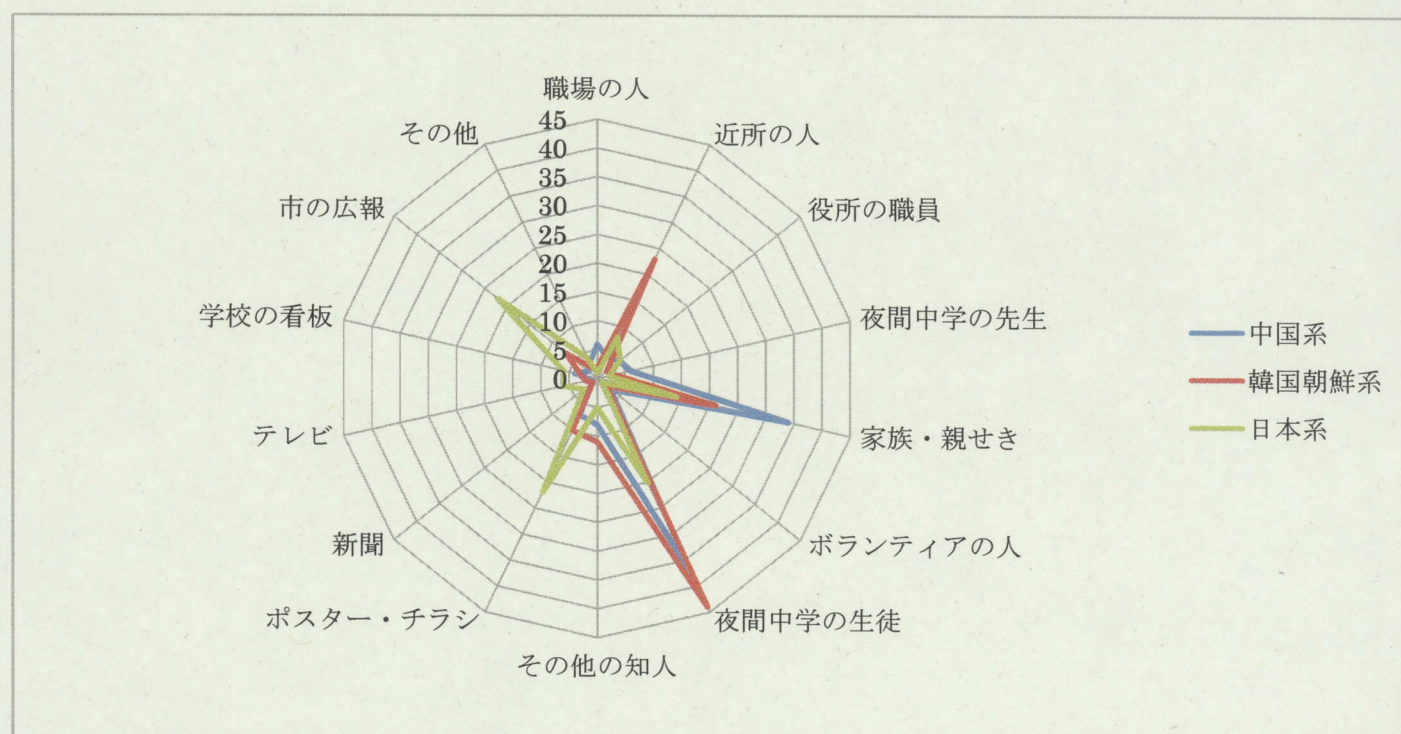




図 30 夜間中学生・系別・夜間中学に通ってよかったこと

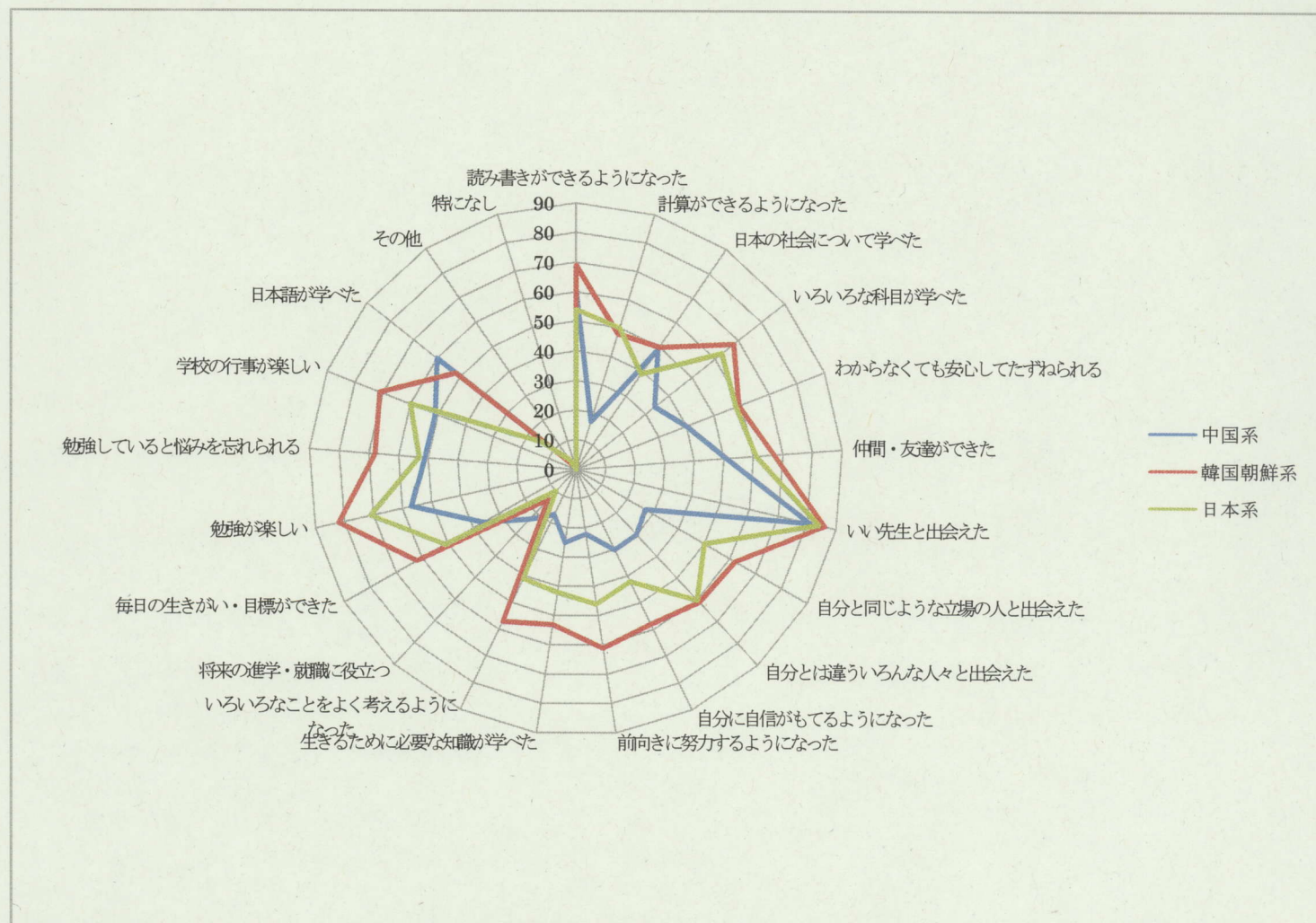
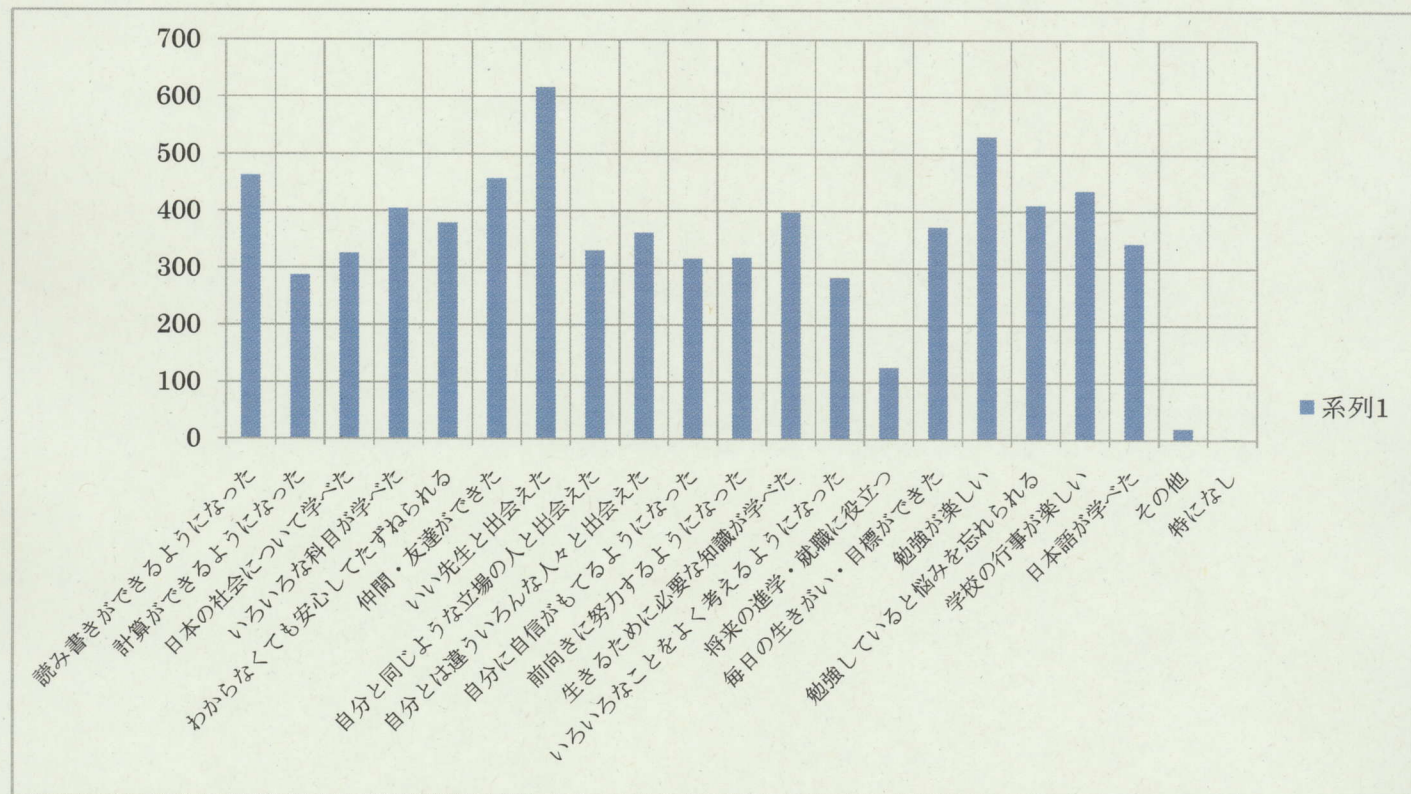




図 31 夜間中学生・系別・悩みの相談相手

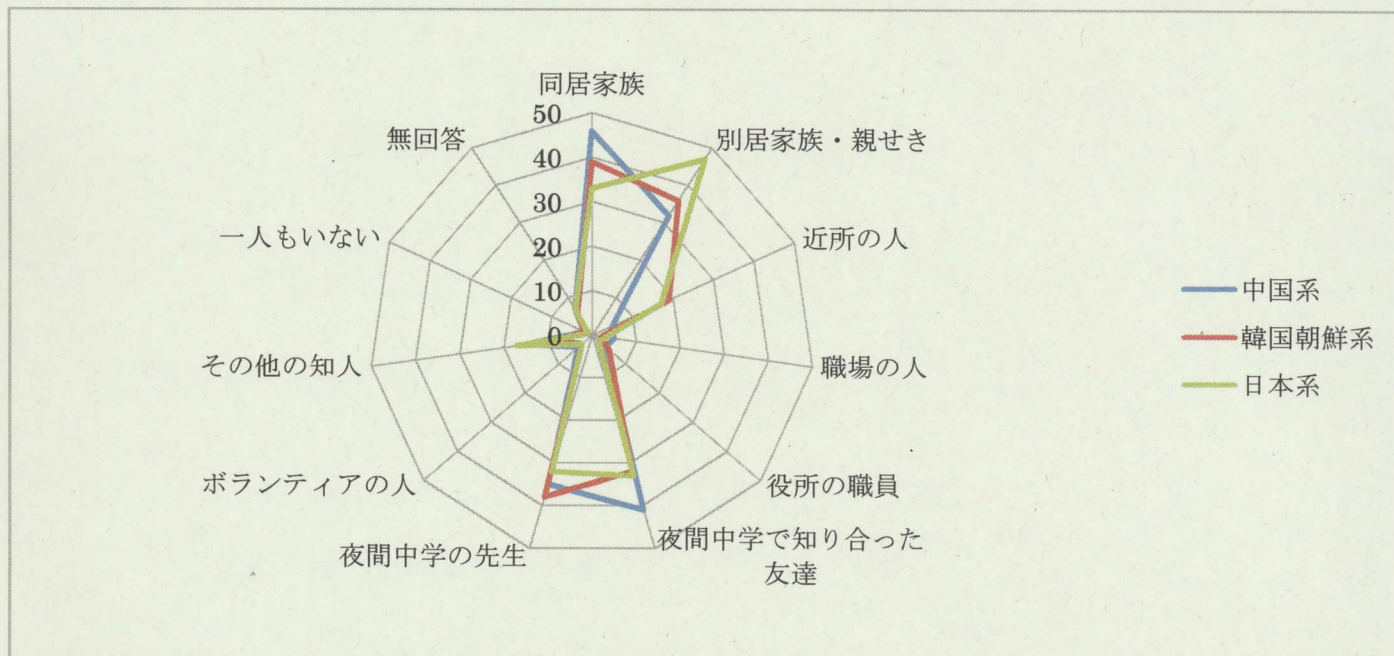


図 32 中国系・在籍年次別・夜間中学に通って、よかったこと

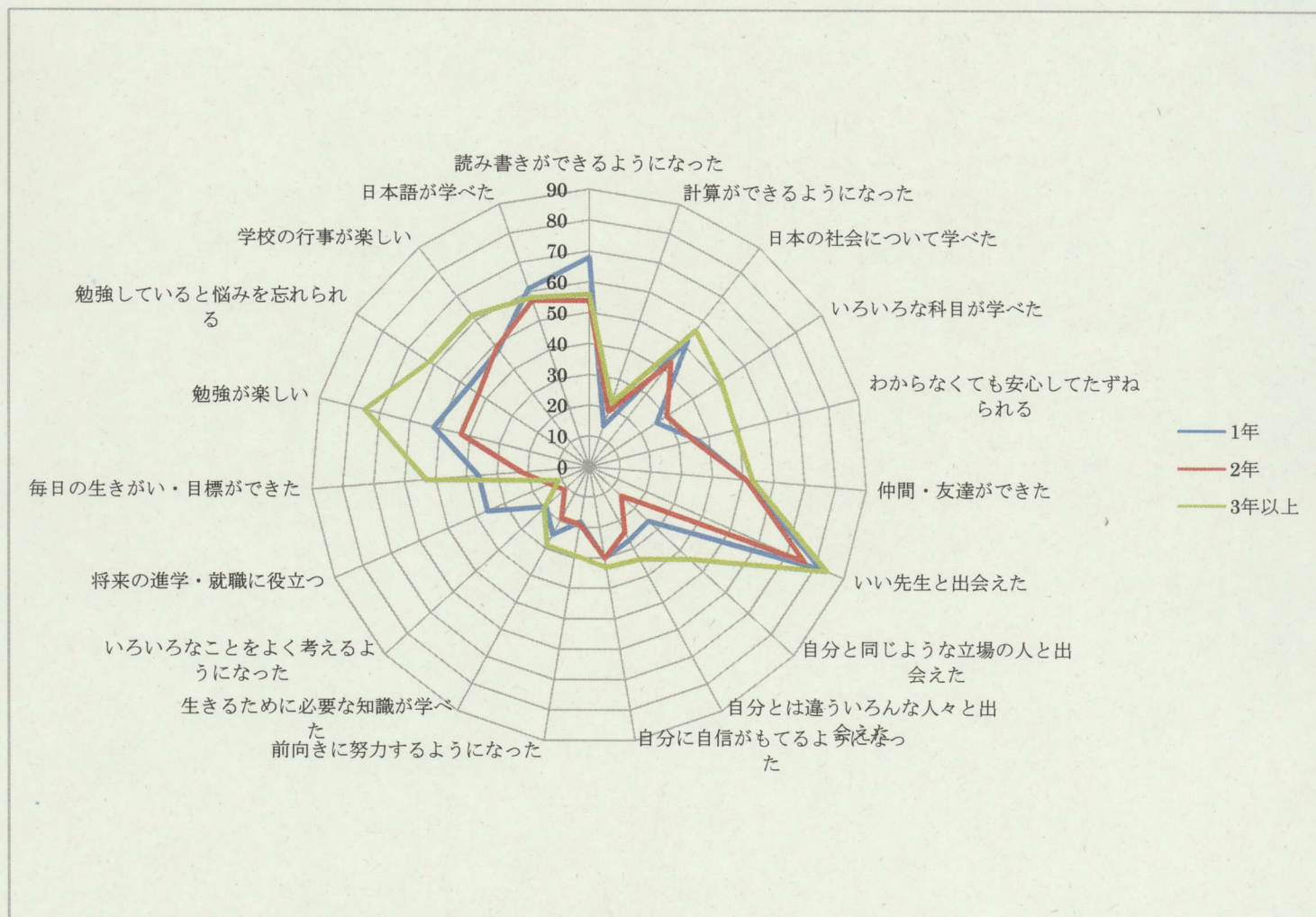
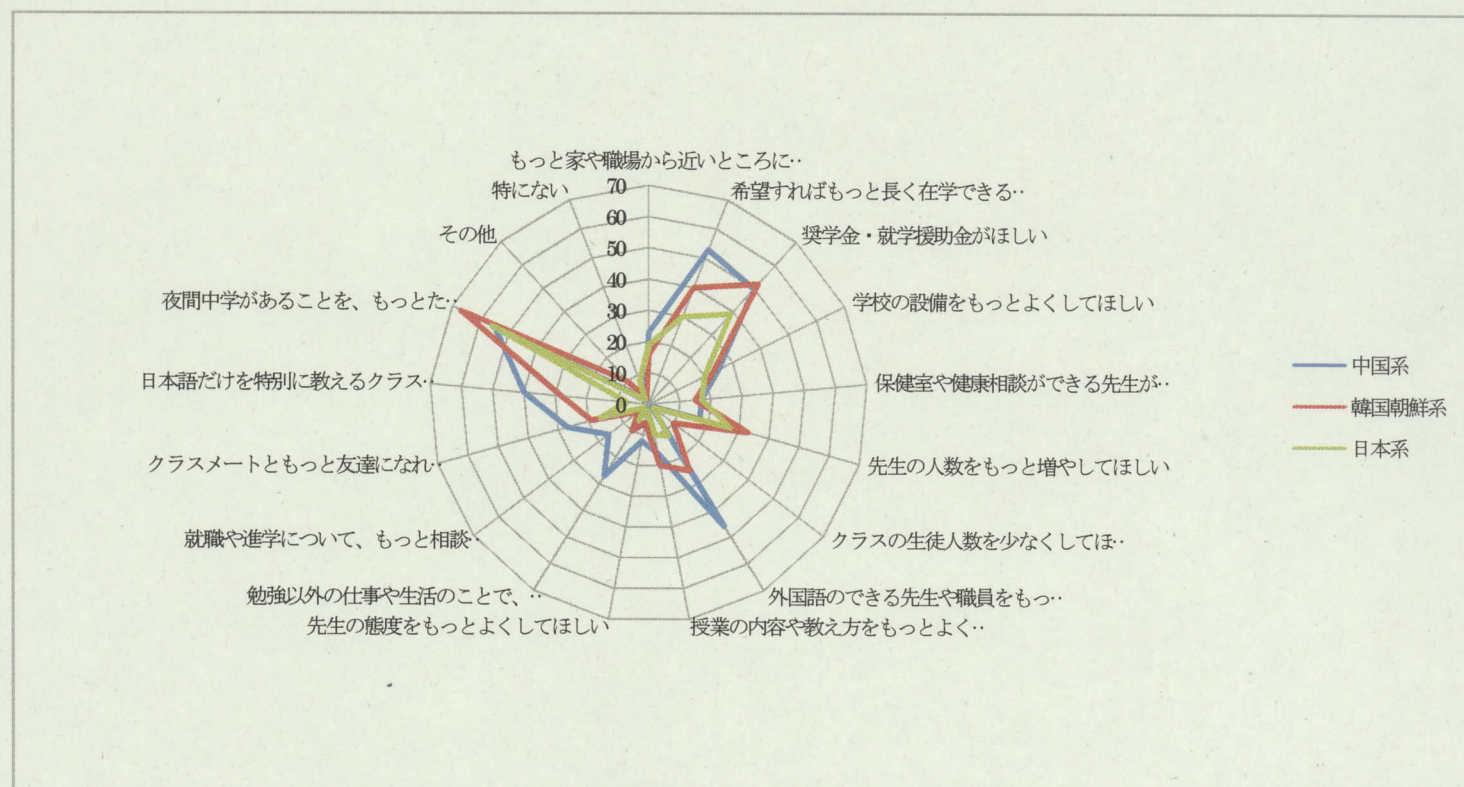
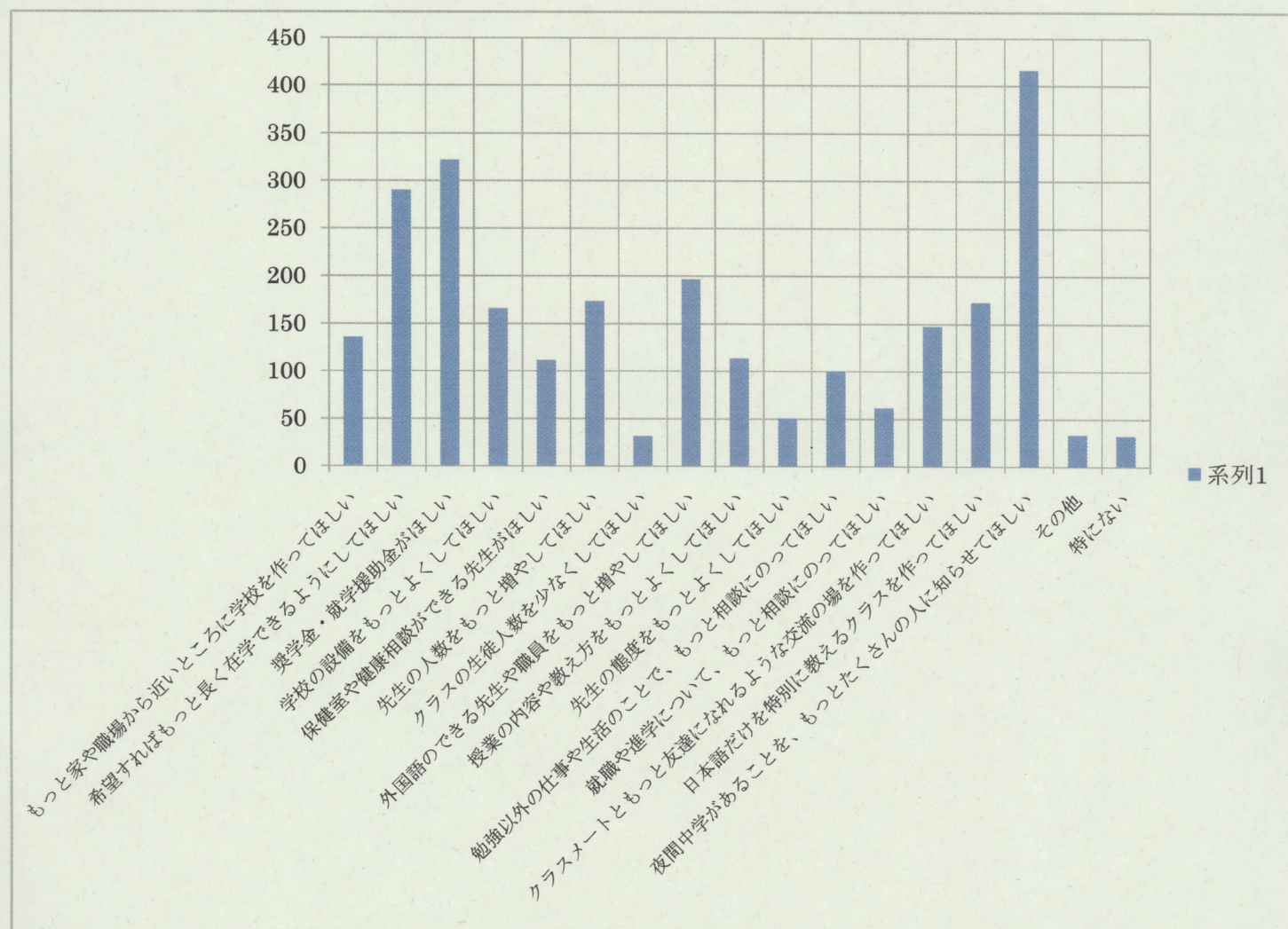




図 33 夜間中学生・系別・もっと、こうしてほしいと思うこと





## 《資料》 残留日本人・日系人の不就学に関する事例

### 1. 残留孤児の不就学について

#### 1-1. 家庭の事情

「養父母が亡くなったが、その後も私は中学に通っていた。夜、必死に手袋作りの内職をして、半年ほど頑張った。でも手袋の納期とか炊事とか、冬には薪で火を起さねばならないとか、とにかく私は落ち着いて勉強できなかった。それで中学2年で、学校を断念した。学校の先生も『あなたの成績なら、高校も入れる。奨学金を申請すれば大丈夫だ』と説得にきた。でも私は、『教室にいても、私は勉強のことをほとんど考えていない。養父母のこと、手袋のことばかり考えている』と答えた。私は養父母も亡くなり、これからどうやって生きていこうかということだけで頭が一杯になり、心細かった。でも私は、続けて学校に行かなかったことを一生後悔している」

「養父母は貧しい農民で、私は学校に行けるどころではなかった。学校というところには、一日もいったことがない」

「養母の家で3年半ほど小学校に通ったが、気持ちは楽ではなかった。生活が苦しく、学校どころではなかったからだ。食べ物すらろくに食べられないのに何が勉強かと思い、学校に行く意欲もわかなかった」

「私は2年間だけ、小学校に通った。でも、家事や薪拾い、豚の放牧で時間をとられ、勉強できなかったのも、小学校をやめた。日本への帰国を申請する時、私は小学校に4年間通ったとウソをついた。学校に通っていなければ、日本政府が帰国させてくれないのではないかと心配したからだ」

「小学1年までしか行けなかった。毎朝毎晩、牛・馬の世話があるし、夏は畑で働き、冬は魚を取らねばならない。一年中一足だけの靴で、冬はとても寒く、学校どころではなかった」

「私は13歳になってから、小学校に入った。それまで養父は私が逃げるのを恐れ、学校に行かせてくれなかった。17歳で小学校を卒業した。私は中学校に進学して勉強したかったが、養父に働くように言われ、進学はできなかった」

「学校には行けなかった。養父母は仕事をせず、毎日ぶらぶらしていて、私だけが仕事をさせられた。私はもう12～13歳だったから逃げるのではないかと思い、それで養父母は私を学校に行かせなかった。私を引き取ったのは、ただ労働力として使いたかっただけだ。どうして学校になど行かせてもらえるのか」

「私は11歳から学校に通い始め、速成班で4年間、勉強して15歳で卒業した。その後、中学校に進学したが、2年間しか行けなかった。私は養母に毎日、よく殴られていたからか、物心ついてから、ずっと頭痛があったような気がする。私は掃除、豚の餌やりなどの家事に追われた。朝、炊事のための火を起こし、豚に餌をやってから学校に行くが、学校は遠かったから、いつも遅刻だった。帰宅後も豚の世話や家事ですぐ夜になり、部屋がひとつしかない上、電気をつけることも許されなかったのもできなかった。養母は、家にカギをかけて私を閉じ込め、自分で外に出かけて遊んでいた。私は外出を許されなかった。中学校の先生は、養母と絶縁したらどうだと勧めてくれた。だから、私はしばらく学校に泊まっていたこともある。でも養母は、学校に来て先生たちと口論をした。私も怖くなり、それにせつかくここまで育ててくれた恩を忘れてはいけないと思って、養母に従い、家に帰った。それで中学校は続けられなかった」

「日本で小学3年生まで通ったが、中国に行くと1年もたたずに敗戦になった。養父母の家に入ってから、学校になど行ける状態ではなかった。私は養父母との関係がとても悪かった。よく仕事をさせられただけでなく、彼らによく殴られたからだ。養父母ともアヘン中毒で、夜中に突然興奮して騒いだり、幻覚・被害妄想で脅えたりしていた。後に生まれた養父母の実子も、赤ちゃんの頃からアヘンの煙で寝かしつけられていた。そんな養父母の家で、私は子どもの世話をしたり、洗濯、掃除、炊事をして、仕事をさっさと終えなければ、すぐに殴られた」

『満州』の日本人小学校に半年ほど通ったが、日本が敗戦し、日本人学校もなくなった。養父母に引き取られてから、ずっと牛の世話をしていたが、10歳頃から中国の小学校に行った。その学校は正式の学校ではなく、4学年の生徒が1クラスで1人の先生が教えていた。先生がある学年を教えている間、他の学年の子は自習だ。私はその学校に1年ほど通ったが、2年生の時、養父母が離婚して、私は養父の叔父の家に送られた。叔父の家は地方都市にあり、その学校は正式の学校だったので、私はもう一度1年生から授業を受けた。でも1年後、私はまた農村の養父の家に戻された。理由はわからない。養父に戻れと言われたら、



戻るしかなかった。また農村の学校で2年生に編入されたが、授業は都市で1年生で習った内容だった。その後、うちは別の農村に引っ越し、私はまた転校した。私は牛の放牧をしていて、牛に蹴られて右足首を骨折し、学校に行けなくなった。村には医師がいなかったため、治療も受けられず、2年間ほどオンドルの上で寝たり起きたりの生活だった。その後、学校には一切行っていない。だから私は3つの小学校に計3年半ほど通ったが、どこも卒業していない。だからその後も就職に苦労した」

### 1-2. 学校でのいじめ・「小日本鬼子」

『満州』開拓団の日本人小学校で3年生まで学んだが、敗戦で中断した。その後、ずっと学校には通わなかったが、14歳の頃、共産党の八路軍が来て、文盲を無くすため、私を学校に通わせるように養父母に勧めた。それで私も学校に行ったが、中国人の子供達が『小日本鬼子を殺せ。日本の獣の子供を死ぬほどなぐれ』と叫びながら、石を投げて来た。中国語も下手で、ひどくいじめられたから、半年ほどで学校をやめてしまった」

「1954年、9歳の頃、養父母は貧しいながらも小学校に入れてくれた。でも学校では、誰からも名前を呼ばれず、『小日本鬼子』と虐められた。学校で日本の侵略の事実を学ぶたび、『お前の親がした』と責められた。学校でも村でも友達ができず、皆から敵のように扱われたが、反抗は一切、できなかった。あまりの辛さに、5年生を終えた所で、小学校をやめざるをえなかった」

「小学校に入学したが、半年間しか通わなかった。その後は全く教育を受けていない。学校で、まわりの子供達から『小日本鬼子』といじめられ、恐ろしかったからだ。それに養父母は貧しい農民で、食べるにも事欠くありさだったので、学費などとても出せる状態ではなかった」

### 1-3. 中国の社会・政治構造

「私は『満州』の日本人小学校を一応、卒業したことになる。実際には、6年間も勉強していない。病気で1年間休学した上、ちょうど卒業の間際が敗戦で、あとは目茶苦茶だった。中国の学校には行ったことがない。ずっと働いてきた。当時、中国の農村では誰もあまり学校に行かなかった。小学校で5～6年間勉強して、計算も少しできる私などは、ましな方だった」

「1949年、中華人民共和国が成立して義務教育になったので、私は満10歳で小学校に入学し、6年後に卒業した。上の学校には入学したが、途中でやめ、その後は学校には行かなかった。当時、そういう子どもはたくさんいた」

「養父母は貧しいながらも、私を小学校に入れてくれた。私は約5年間、学校に通うことができた。当時は、村では中学校への進学など考えられなかった。私は小学校を出てからずっと養父の農作業の手伝いをして、学校で勉強した知識は全部忘れてしまった。今では書くこともできない」

「中学2年生の途中で退学し、木工機械製造工場に機械工として就職した。家計を助けようと思い、働く決心をした。ちょうど学校から家に帰る途中、工場が人を募集していた。私は皆と一緒に応募した」

「中学を3か月で退学し、家計を助けるため、製薬工場で働いた。ちょうど中国の『大躍進』時代で、鉄鋼を大いに作ろうという政治運動があり、学校でもろくに勉強しなかった。中学でも毎日、鉄鉱石の運搬やコークス作りの作業ばかりだった。うちは6人家族だが、収入は養父の50元位しかなかった。それで私は、学校をやめようと思った。姉の紹介で、製薬工場に入った」

## 2. 残留孤日本人の配偶者・二世の不就学について

「小学校2年で中退した。中退ともいえないかもしれない。実は弟が小学校に通っていて、その学校は家から遠いので、私は弟の送迎・付き添いとして、小学校で2年ほど聴講しただけだ。その後、母が亡くなり、私も弟も学校へ行けなくなった。だから私は字がほとんど読めない。日本語を勉強する時、本当に困る」

「私が12歳の時に父が亡くなった。きょうだいは7人で私は6番目だ。貧しくて、私は学校には通えなかった。姉は出稼ぎに行き、私達を呼び寄せてくれた。1960年前後は自然災害のため、食べ物もなく、学校に行けない人はたくさんいた」

「1962年、母がリュウマチ性心臓病で倒れ、私は当時、まだ小学校2年生だったが、母の看護のために、学校をやめてしまった。父は元は副町長だったが、政治的に批判され、当時は入獄していた。私の下には3人の弟妹がいて、生活は苦しかった。私は長子だから、母の看護は私がするしかなかった。1964年に実父は出獄したが、やはり政治的に問題があるとして、私達一家は農村に下放された。父はまもなく死んだ。その後も私は学校に通ったことがない」



「私は1984年に貧しい農村で生まれた。母は亡くなり、父は農民だ。私の中国での最終学歴は小学校卒業だ。中国の中学校2年生の時に学校をやめ、出稼ぎに行った。町に出て、レストランの店員の臨時雇いで働いた」

### 3. 夜間中学について

「夜間中学の先生はとて素晴らしい人で、最初の半年間は私達一家6人のために、教頭先生自身が担任になって、特別クラスを開いてくれた。そしてゼロから日本語を教えてくれた。今、私達ができる日本語は、すべてこの夜間中学で学んだものだ。先生方に心から感謝している。私達の勉強の進歩が遅いとすれば、それは私達の年齢のせいだ。若い中学生なら1年で覚えられることでも、私達はそうはいかない。私達は、毎朝5時に出勤して、午後5時から6時まで仕事をしている。仕事はすごくきつくて、ケガをするのも日常茶飯事だ。それでも毎日、私達は必ず夜間中学に行く。会社の同僚の中国人に、「夜間中学の勉強なんて、絶対に長続きしないよ」と言われた。でも私達は絶対に続ける決心をしている。夜間中学の授業は午後5時30分からだから、仕事が終わって駆けつけても、1時間目の授業に遅刻する。先生方はその点も配慮して、重要な授業内容は2時間目に回してくれている」

「中学校はとて素晴らしい。ただし中学校では、他の国のクラスメートとはあまり交流していない。もちろん言葉の問題が原因だが、学校の方でも、もっと交流の場を作ってほしいと思う。今、ホテルで仕事をしているが、以前、弁当工場で働きたいと思ったことがある。弁当工場の方が時給が高いし、もっと長時間仕事ができるからだ。でも、弁当工場はほとんど夜間の仕事で、夜間中学の時間とぶつかる。それで、弁当工場には行かないことにした」

「厚生省の帰国者定着促進センターで4カ月間、日本語を勉強したが、まったく身につかなかった。五十音も覚えられなかった。厚生省がやった日本語教育は形式的なものにすぎず、4カ月の任務が終わればよい、それ以降は個人任せだ。本当に日本語が身についたかどうかなど、全く無関心だ。その後、私は民間のボランティアの日本語教室でも週2回2時間ずつ勉強したが、これもあまり勉強にならなかった。そして今、夜間中学に通っている。私にとっては3度目の日本語の勉強だ。夜間中学では来日後、初めて、よく勉強できている。週5日で教え方もいい。体系的に学んでいるという感じがする」

「私は2年間、ボランティアの日本語教室に通った。毎日午前2時間位の授業だったが、学ばないよりは多少勉強になった程度だ。今は、他の残留孤児帰国者の紹介で、夜間中学に通っている。夜間中学は親切で、ていねいに教えてくれるのでとても勉強になった。日本語の力は、ずいぶん進歩したと思う。ただ私は中国でも学校に行っていないので、漢字の読み書きができない。だから日本語の読み書きを学ぶのもスムーズに進まない。それにもう年だから、記憶力が衰えている。普通の日本人の中学生なら3年で学べることで、私にはとても無理だ。この夜間中学にきて、驚いたことがある。日本人にも、学校に行けなかった人がいる。この夜間中学には、在日朝鮮人が多く、また日本人の不就学者もいた。夜間中学にきて初めて、日本人にも貧しくて学校に行けなかった人がいたと知り、本当に驚いた」

### 4. アンケート調査より（「中国系」の自由記述）

「仕事の面接を受けるとき、日本語がわからないと採用されない。病院に行く時も、医者の説明できない。銀行でも買い物でも、道に迷った時も、しゃべれないので困る。子供の学校の懇談会に参加した時も、先生と交流できずに困った」

「当時は中国の自然災害の時期で食物もなく、私は家で妹の面倒をみたり、家事をしたので学校には通えなかった。今は日本語が不自由なので仕事がみつからない。病院に行くと、医者きちんと病状を説明できないので悩んでいる」

「日本での生活は友達が少なく、ストレスがたまりやすい。寂しく感じている。夜間中学校は永遠に存在してほしい。もっと大いに発揚してほしい」

「夜間中学は、日本語を習っているだけでなく、心の中の苦しさを少し緩和できる所だ。そして命を与える大切な場所だ。夜間中学がなくなれば、命がなくなるような感じがする。私にとって夜間中学はとても重要な存在だ。私は被害を受け、記憶力があまりよくないが、毎日日本語を続けて習うことで、記憶もだんだんよくなる気がする。日本語ができないとどんなことでも不便で、続けて日本語を勉強することは大切だ」

「私達中国帰国者は、言葉が通じないのでとても困る。就職の面接でも、日本語ができなくてだめだと言われる。まだ若い人はい



い。私達のような、日本語がわからず、若くもない人は、どうすればいいのか。在学1年目の時に胃の病気になった。本当に困る。夜間中学が9年制になるのは、本当にいいことだ」

「友達がいなくて、孤独で寂しい。浮草のように根がなく、寂しい。日本語がわからず、遊ぶ場所もなく、よく道に迷ってしまう。仕事がなく、不自由な生活で、経済的にも苦しい。生活はすべて苦しい。いつも居候のように我慢しなければならないという気持ちで、頭を離れない。時々、痴漢に会うのも怖いし、差別されるのも悲しい。金がないので中国にも帰れず、いつも中国のことを思っている」

「生活が苦しく、家族と離れて暮らしているので、寂しく、家族が懐かしい。仕事はきついし、日本語もわからず、いじめられて、押し潰されたような気持ちになる。何でも自分一人で生活の様々な困難を引き受けなければならないのは、とても疲れる。毎日、夜間中学で勉強できるのはうれしい。先生と一緒に勉強でき、先生に感謝する。でも、先生に助けてもらっても、やはり苦しい。先生の気持ちには感謝する。今後もよろしく」

「中国語ができる先生がまだ少ないと思う。先生が中国語を全然わからなければ、勉強も交流も不便になる。中国語ができる先生を増やしてほしい。そして9年制にして長期の在学を認めてほしい。夜間中学で勉強する学生は大部分がもう高齢で、記憶力もよくないので、もっと長期間の勉強ができる方がいい。夜間中学の教育経費は、国家や地方の公的財源でまかなうべきだ。夜間中学の合法化・法律化を求めたい」

「就学補助金と補食費をもらいたい。そうすれば、心配事もなく勉強できる。夜間中学で勉強することは一番楽しい。先生はとても親切で、まじめに授業をする。中国語ができる先生もいるし、日本語を習っていてわからない時も中国語で説明してくれるから理解できる。先生は自分の親戚のようで、毎日、クラスメイトや先生と一緒に勉強していることは、私にとって一生、忘れないことだ」

「私は母が日本人だったので、文化大革命の時代に学校に行けなかった。今は体の具合がよくないし、記憶力もよくないので、8年間の勉強では不十分だ、続けて学校で勉強したい」

「日本社会になじむため、日本語をぜひ学びたい。他の人と交流したい。でも、仕事と勉強を両立させるのは簡単なことではなく、夜間中学はこうした機会を提供してくれる。困ることはいろいろあるが、困難を乗り越える決心をもって、引き続き勉強したい。この貴重なチャンスを大切にしたい。夜間中学の先生に感謝する」

「日本語がわからないから、何をしてもうまくいかない。日本語は簡単な挨拶しかできないから、人と交流できない。だから友達がいなくて、学校の先生は皆、いい人だ。ここに来てから、私はいろんな面で変わった」

「今、仕事が少なく、経済的に非常に困っている。仕事先では、仕事時間がすごく短いため、月給も少ない。だから学校が交通費と奨学金を出してくれたら、ありがたい。そして長く夜間中学で日本語を勉強したい。夜間中学の勉強を通して、日本での生活にだんだん慣れるようになってきた」

「中国語ができる先生に、もっと長く学校に残ってほしい。日本語の指導をしてももらいたい。日本語ができなくて、生活には非常に不便だから、できるだけ早く日本語を身につけたい」

「日本での生活は、次の詩の通り。『煮豆持作羹 漉鼓以為汁 箕在釜下燃 豆在釜中泣 本是同根生 相煎何太急（豆を煮て、もって羹となし、鼓を漉して以て汁と為す。豆殻は釜下に在りて燃え、豆は釜の中に在りて泣く。もとは是れ根を同じく生じたるに 相煎ること何ぞはなほだしく急なるや）』（曹植）」

「来年、高校に行きたいが、中国にいたころ、高校に行ってなかったのだから、直接日本の高校に行けなさそう。その点について、先生たちが何とかしてくれたらありがたい。本当に来年、高校に行きたい」

「いろいろ教え、気を使ってくれる先生方に感謝の気持ちを表したい。先生たちのおかげで日本語がだんだんうまくなってきた。生活も幸せになってくるような気がする」